

の講義を持っておられ、海外出張の間をのぞいてはまず休講はなかった。その1つは天体力学で、あとの2つは上記の題目からえらんだ天文学特別講義で、午前中の1つは2時間で終るが、あとの2つは3時間から4時間も続く。先生の特技は数式を黒板一杯に書きながら、他のことをしゃべれることで、これでは学生はノートもとれない。この講義のノートの一部が後に大著 *Celestial Mechanics* 全5巻(5600頁)の原稿になる。

先生は、筆者が学生の頃は東京天文台長などでお忙しく、また、東京天文台に就職してからは、先生とは台長と職員組合の委員長という関係が長く続き、個人的にお話したことはほとんどない。組合の委員長として先生に感謝していたのは、東京天文台を職員が意欲をもって働ける、働きがいのある職場にしたいという我々の立場を多少なりとも理解して下さったことで、公式の場では、我々の要求に対し「そんなことは駄目だ」と言われても、後で、「あれはこう処理した」と何とかして下さったことも少なくない。また先生が時々仕事はうまくいっているか、研究の進み方はどうかと声をかけて下さったことを忘れられない。

先生といろいろお話をするようになったのは、先生が東北大学退官後、筆者も滞在していたスミソニアン天文台に度々こられるようになってからである。もともとスミソニアン天文台に筆者が行くようになったのも、台長のホイップルが、スプートニク以降天体力学者の不足をおぎなうのに、萩原先生のところなら誰かいるはずと、探しにきたためである。先生が大学を退官されたことをホイップルに云うと、早速にでもきていただいた

いということになった。ホイップルは先生に長い聞いてほしいという意向であったが、先生の方は、あの辺の寒い冬はいやだということで、夏をはさんでだけこられた。同時にイエール大学のブラウワー台長からも話があり、その夏季大学で毎年のように講師をつとめられた。

先生は、アメリカでも日本でも同じように講義をされるので、アメリカの親切な講義になれていた聴講生はかなりまごついたらしい。ブラウワーも、「萩原先生は学生に親切でない」と筆者にこぼしたことがある。といっても先生の広い学識には驚いたらしく、彼の推薦によって1960年にはアメリカ学士院からJ. ワトソン・メダルをおくられ、また、彼の後をついで、1961年から2期6年間、IAUの天体力学委員会の委員長をつとめられた。同時に、IAUの副会長もつとめておられた。

先生のアメリカでの講義は、しかしながら、ヨーロッパ育ち、特に東ヨーロッパ育ちの天体力学者に深い感銘をあたえた。そして、彼等のすすめで *Celestial Mechanics* の出版を決意される。その第1巻は「天体力学の基礎」の英訳であり、それ以降は、70才を過ぎてから執筆されたものである。

正直に云ってこの本は初心者向けの教科書ではなく、先生の講義と同じく難しく、しかも統一のとれたものでなく、筆者も校正のお手伝いをしたが、かなり誤りがあるはずである。しかし、天体力学のすべてをもうらしていることは確かである。なによりも、先生が80才すぎまで、このような本をお書きになったことはただ頭が下るばかりで、筆者も死ぬまでに、せめて、この1巻分でも書けるようにと努力したいと思っている。

故萩原雄祐先生(1897~1979)略歴

明治30年	大阪市に生れる。	27年	ヨーロッパへ出張(IAU総会など)
大正10年	(1921年)東京帝国大学天文学科卒業 東京帝国大学助手兼東京天文台技手	29年	文化勲章
12年	東京帝国大学助教授	31年	東京大学評議員
12年~14年	在外研究員として欧米へ(ケンブリッジ大学など)	32年	東京大学退職、東京大学名誉教授、東北大学教授
昭和2年	兼任東京天文台技師	35年	東北大学退職、宇都宮大学学長(昭和39年まで) 米国学士院より J. Watson 賞
3年	米国へ出張(ハーバード大学など)	36年~42年	IAU副会長・天体力学委員会委員長
5年	理学博士	40年	宇都宮大学名誉教授
10年	東京帝国大学教授兼任東京天文台技師	42年	瑞宝勲一等
13年~14年	欧米各国へ出張(IAU総会、ハーバード大学など)	51年	朝日賞
19年	帝国学士院会員	54年	死亡
21年	東京天文台長		叙正一位、銀杯を賜る。
25年	ヨーロッパへ出張(URSI総会など)		